Ⅱ　大山ふるさと伝承
～太古の昔から信仰を集めた“伯耆の山”～

１．　金蓮上人　ものがたり

＜大山寺を開いた金蓮上人＞

- 金蓮上人とは、養老年間（西暦 717～723）に大山に入り地蔵菩薩を祀って大山を開いた伝説上の人物である。
- この伝説は、「大山寺縁起」という大山寺に伝わる伝承集に描かれている。この大山寺縁起は、大山寺の起源や信仰のすばらしさを伝えるために作られたものである。著者は不明であるが、この縁起をもとにして書かれた大山寺縁起絵巻が応永 5 年（1398 年）に完成していることから、それ以前にできたものと思われている。
- この縁起は、情報通信手段がなかった昔、お寺の信仰を伝えるために作られたフィクションである。その信仰のすばらしさを強調するために、いろいろな物語を作り分かりやすくお寺の起源や御利益などを人々に伝えた。今風にいえば、お寺のＣＭや広報誌のようなものである。ほとんどの内容がいわゆる伝説であり、作り話であるといわれているが、その中に昔の人が伝えたかった真実が秘められているように思う。
- 大山寺縁起の第七段に金蓮上人が大山寺を開いたときの話が描かれている。このくだりは、いろいろな物語として伝わっているが、ここでは原文とその現代語訳を紹介することとする。

＜原　文＞

- ✓ 出雲の国玉作（り）と云ふ所に猟師（りょうし）あり。名をば依道（よりみち）と云ふ。美保の浦過ぎけるに海の底より金色の狼（おおかみ）出で来る。
- ✓ あやしみ追ふ程に此の山の洞に入りにけり。山の形水の流れ故有る所にこそとあやしく思ひけれども、かかる毛色したるけだ物世に有りがたく思ひて、只一矢に射ころさんとしけるに、地蔵菩薩矢前（さき）に現じて見え給へば信心忽ちに発（おこ）りて、弓をはづし矢を捨て殺生（せっしょう）の思ひをたちにけり。
- ✓ 彼の狼いつしか形を変じて老尼（に）と成りて語り申しけるは、我は是れ登攬尼（とらに）なり。汝を導き此の山に入らんが為に化して獣（けだもの）となりき。我れ己に三生（しょう）の行人（ぎょうにん）として、此の山を守る山神（ほら）となれり。汝又宿縁我に有り。願はくは、此の洞に行きて諸共に地蔵権現の利益（やく）にあづかり給へと、さまざまかたらひ申しければ、道心速かに発りて髪をそり衣（ころも）を染めて、同心に行ひすましつつ、金蓮聖人（こんれんしょうにん）とて練行（ぎょう）年つもりにけり。

＜現代語訳＞

伝承者　千藤広氏：現代語訳指導

- ✓ 出雲の国玉造というところに猟師がいた。名を依道といった。美保の浦（美保関）を通り過ぎたときに海の底から金色の狼が出てきた。
- ✓ 不思議に思い後を追っていくとこの山（大山）の洞穴に入った。すばらしい山の姿、清らかな水の流れる場所であり何か由緒のある所で不思議だと思ったが、このような毛の色をした獣はこの世に滅多にないと思って、一本の矢で射殺そうとしたところ、地蔵菩薩が矢の前に立ちはだかりなさった、するとたちまち信心の心が起きて、

つがえていた矢を捨てて殺生の思いがなくなってしまった。

- ✓ この狼はすぐに姿をかえて老いた尼となって言われることには、「私はとらに登攬尼というものです、あなたを導いてこの山に連れてこようと思い獣に姿をかえていた。私は三生（前世、現世、来世（後生））の修行者として、この山を守る山の神となった。あなたは前世からの因縁で私とこのように巡り会うこととなっていた。願わくは、あなたは私と一緒にこの洞穴で地蔵権現のご利益にあずかりなさい」と言われた。そして、その他にもいろいろなことを教えていただいたので、すぐに仏道の心が湧いてきて髪を剃り、衣を黒く染めて、登攬尼と同じ気持ちでひたすら修行をしながら、金蓮上人となって修練や修行を何年も何年も行った。

＜なぜ、玉造の猟師が美保の浦から＞

- 日本で最も有名な伝説は、日本書紀、古事記である。日本の起源を伝説の中に描き、後世に伝えるものである。これらの伝説の中に作者の伝えたかった本当のメッセージが隠されているのではないかと多くの人がその秘密を研究している。
- また、この地方に伝わる「国引きの伝説」の中でも、新羅の国や越の国から土地を引っ張るなど昔の交流のあった場所を伝説に描き、史実を後世に伝えている。

- この大山寺縁起を見ていくとある一つの疑問が浮かんでくる。
- なぜ、玉造の猟師が美保関まで行って、それも海の中からでてくる狼を追いかけなければならなかったのか。米子の猟師が会見町に行って林の中からでてきた狼を追いかけても良かったのではないか。
- この疑問を数人にぶつけてみると。

伝承者　杉本良巳氏：

- ✓ 玉造の漁師でなければいけなかった理由について。お寺も信仰があって初めて成り立つ。信仰が厚く多くの寄進をしてくれる人たちを大切にしたはずである。
- ✓ その昔、玉造はその名が表すように「まが玉」を作るところであり、多くの富を持っていた地域であったと思われる。
- ✓ 大山へ納める宝物も作っており、多くの寄進もあったのではないかと語る。

- 大山寺縁起の中には有名な生きたお地蔵さんの話がある。
- 備後の国「神石（かめし）」に信仰の厚い人がいて、生きた地蔵を見たくて下野の国「岩舟」（現在の栃木県）まで行った話である。

伝承者　杉本良巳氏：

- ✓ 備後の国「神石」、現在の神石町（じんせきちょう）は広島牛の大産地であり、たたら製鉄の集積地である。そして大山への信仰がもっとも厚い地域であった。
- ✓ たたら製鉄で土を取った後の開けた平地で放牧して牛を育てた。豊かであったその地方の人々は、大山講をして毎年村の代表が大山参りをしたという。
- ✓ いわば大山にとってはお得意さまであった。現在でも神石町に行くと公民館に「大山参り」「大智明権現」などと書かれた幟が立っており、今なお大山への信仰が続いていることを物語っている。

- それでは、なぜ美保関のそれも海から狼が現れなければならなかったのか。
- 美保関は、出雲神話の中でも重要な役割を果たしている。

伝承者　武光誠氏：「古代出雲王国の謎」

- ✓ 国引き伝説では、八束水臣津野命が越の沖から取ってきたと伝わっている。
- ✓ 国譲り伝説では、「高天原から降りてきた武甕槌神らは、出雲の稲佐の浜に降り立ち大国主命と交渉し、ついで美保埼に移って大国主命の子の事代主命に国譲りに同意させて身を隠させる（死の世界に行かせること）」とある。

伝承者　相見行佳氏：

- ✓ 島根半島には、大陸文化の痕跡が強く残っているところである。朝鮮半島から沿海州にかけての人々が多くの文化を持ち込んだのではないかと語る。

伝承者　杉本良巳氏：

- ✓ 海から狼が現れたことは、神様が海から渡ってきたことを表しているのではないかと語る。

- 今まで述べてきた、出雲の神々と海との関係やそこに残された痕跡から考えると、海の向こうから何かが伝わってきたことを感じさせる。

＜地蔵信仰＞

- 大山信仰の中心は、地蔵信仰である。
- 大山の守り神であった登攬尼の前に立ちはだかったのが地蔵菩薩である。そして、大山の洞穴に祀られたの地蔵権現は、地蔵菩薩が姿をかえて神様として現れてきたものである。この地蔵権現こそが大山のご本尊である大智明大権現である。

- 大山の最も大切なところは、賽の河原とそれを見下ろすところにある大智明大権現社（今の大神山神社奥の院）である。
- 賽の河原は、死者の霊が集まるあの世とこの世の境にあり、金門は（昔は、「禁門」と書いたようである）あの世の入口といわれている。死んだ人の霊は高い山に集まるという信仰から来ているといわれている。
- そして、大智明大権現社には、地蔵菩薩が祀られており、大山信仰の中心である。

伝承者　杉本良巳氏：

- ✓ 高野山の地蔵院や京都の壬生寺などお地蔵さんを信仰するお寺はたくさんある。
- ✓ しかし、大山のように寺院集団が信仰の中心としてお地蔵さんを大切にしているところは珍しいと語る。

- 仏教は今から約 2500 年前にインドで生まれたとされている。釈迦は、当時インドで信仰されていた、バラモン教の神々を引用して自分の教えを説いたという。地蔵菩薩もバラモン教の神が原型といわれている。

- インドで生まれたお地蔵さんは、ガンダーラ、バーミヤンをへてシルクロードへ、その後タクラマカン砂漠を通り敦煌、洛陽、北京へと伝わっていった。三蔵法師がどのような気持ちでお経を中国へ持ち帰ったのだろう。
- そして、日本には六世紀半ば、百済から伝わったといわれている。遠いインドで生まれたお地蔵さんが長い道のりをかけて、たどり着いた場所がこの大山寺ということになる。そう考えるとシルクロードの延長線上に大山寺が見えてくる。

＝聖域大山＝

- 大山は、その山自体が信仰の対象であり、聖域とされてきた。弥山禅定の行事にも見られるように、明治時代まで選ばれた数人の行者だけしか山頂に登ることを許されていなかった。また、山内は女人禁制であり、女性の入山は禁じられていたようである。
- 大山には、登ってくる人たちを浄めるいろいろな仕組みがつくられていた。大山寺参道から大神山神社へ続く参道を少し歩いたところに無明橋という小さな橋がある。この橋の裏には無数の仏様やお経が掘られており、橋を渡ると身体が浄められると言う。
- 鍵掛けの風習もその一つである。紅葉の名所で知られる大山環状道路（昔の作州道）の鍵掛峠や日野郡日南町多里から国道 183 号線を広島に抜ける峠も鍵掛峠と言い、この清めの風習が行われた場所といわれている。
- 遠藤氏が昔、父親に連れられて大山参りをしたときの話として。

伝承者　遠藤勝壽氏：

- ✓ 大山寺の少し手前で休憩を取った。そこには川が流れており、「ここで待っていなさい、鍵掛けさんに鍵を掛けてくるから」と言って、父は林の中に入っていった。
- ✓ 残念ながら鍵を掛けたところは見たことがなかったが、鍵型の木の枝をご神木のような木に投げあげて引っかけていたのではないかと語る。

- そこは、坊領（大山口駅）から上がってくる大山みち沿いにあり、道端から小さな河原になっていた。川の水を飲んだり、汗を拭いたりして父親の帰りを待ったと語る。
- その川が精進川であり、金蓮聖人が寂静されたという寂静山の麓の谷を源流にして日本海にまで注いでいる。
- その場所は県道大山－佐摩線を大山寺から少しくだり、大山館観光道路から続く通称天皇道路と交わる交差点の辺りである。少し林の中に入ったところに小さな祠があり、それを囲うようにして石垣の跡が残っている。鍵をかけることにより身を清め神聖なる大山寺に参る準備を整えたのだろう。また、精進川で水を飲んだり、汗を拭いたりすることも一つのお清めの儀式ではなかっただろうか。

- 大山で旅館を経営する足立氏によると。

伝承者　足立修氏：

- ✓ 鍵掛けの風習は、山の幸せや身の安全を祈って行われた。
- ✓ また、12 歳の男の子（地方によっては 2 才と 10 才の時）に初めて大山参りをする風習がある。霊場である大山の神様に縁を結ぶと言うことで、二股の枝で鍵型を作り石仏に供えた。子どもの無病息災や健やかな成長を祈ったものであると語る。

＜大山を守る四角山王＞

- 大山寺縁起の第二段には大山を守る山王が描かれている。
  - ✓ 又都率天第十六院宝光菩薩あまくだる。ここには智勝仙人と申すなり。三千六百日十一面・虚空蔵・不動明王・毘沙門等の四人の大士を安置して行ひければ、かたちを四所に現じて四の角に居して、弓矢を取り太刀・刀を持って各の西戒防衛の誓ひをおこし給ひき。今の木の目岩の目剱石と申す四角山王是れなり。是れより権現の神徳をかざり山王の垂迹をあがめ此の山を大神山と名づけたり。絵にこれ在り。
- 応永 5 年(1398 年)8 月大山寺縁起をもとにして、備前の入道了阿が書いたとされる大山寺縁起絵巻の中にも描かれている。第一巻にあるその絵はには、地蔵菩薩を守るように木目石目剱動として四角山王が描かれている。
- 600 年以上も前から伝わっていたこれらの伝承を、今の大山で垣間見ることができる。
- 米子市文化財保護審議委員を務める川上氏によると。

伝承者　川上廸彦氏：

- ✓ 木の目山王は作州道、剱の目山王は坊領道、動の石山王は赤崎道にある。
- ✓ もう一つ岩の目山王は、米子方面からの道の赤松の辺りにあったのではと語る。

伝承者　清水谷登氏：「大山探訪」

- ✓ 古くは、大山寺に通ずる四つの大山道と言われている横手道、尾高道、坊領道、川床道には山王と仁王をおいていた。古地図によると、横手道には木目山王、尾高道には仁王堂、坊領道には鍵掛け山王、そして川床の倉吉道には動石山王がありこれが現在川床道にある烏枢渋摩明王とある。

- 横手道の旧大山道に紀成盛が寄進したという鳥居がある。その傍らに木ノ目地蔵というお地蔵さんがあり山王堂跡と言われている。これが大山寺縁起絵巻に描かれている「木の目」山王ではないだろうか。
- 大山寺から赤崎方面に抜ける川床道を行くとスキー場の傍らに烏枢渋摩明王という像がある。この像にまつわる様々な伝承もあるようであるが、これが大山寺縁起絵巻に描かれている「動の石」山王ではないだろうか。
- そして、坊領道の傍らの林の中にある古い祠が「剱の目」山王すなわち「鍵掛」山王ではないだろうか。

- 残る一つ「岩の目」山王については、いろいろと意見が分かれているようである。
- 江戸時代、大山山内の行政の中心であった、本院西楽院に伝わっていた古文書を解説した大山寺本院西楽院要用雑録によると。

伝承者　難波睦人氏：「大山寺本院西楽院要用雑録」

- ✓ 山内の堂社の修復について定めた件に、次のような記述がある。
- ✓ 汗入り道の山王修復の時・・中門より人足等これを出し候
- ✓ 西明口山王修復の時・・人足等西明よりこれを出す
- ✓ 河床東の山王は・・中門よりに人足等差し出し候事
- ✓ （此の山王の事、当山の旧記には「四角山尾と言う社にて、当山開闢の砌鎮座の神

にて、由緒これ有る神也」いつ頃よりか“山王、山王”呼び習い、終に日吉山王社の取り扱いに致し来り候。祭礼も四月中の申の日　法楽致し候）

- ✓ 山王の所在
- ✓ １．西明口　　２．汗入り道　　３．河床の東　　４．本社の傍ら　四カ所也

・ ここで言う西明口とは、横手道にあった「木の目」山王のこと。汗入り道とは、坊領道にあった「剱の目」山王（鍵掛山王）のこと。川床の東とは、川床にあった「動の石」山王のことである。そして、江戸時代に大山寺に伝わっていた四つ目の山王は、「本社の傍ら」すなわち大智明大権現社（大神山神社奥の院）の傍らにあったことになる。
・ 山王が昔どこにあったかは別として、数百年前のものがたりがこの大山で感じられる。大山寺縁起絵巻に書かれている四つの山王に昔へのロマンが浮かんでくる。

＝大山寺中興の祖“豪円僧正”＝

・ 実在した大山寺の僧侶の中で一番有名な人が豪円僧正であろう。
・ 江戸時代の約 300 年の間が大山寺の最も輝いた時代である。そのよき時代の基礎を作り上げたのが、この豪円僧正である。豪円僧正は、徳川家康とも親交があったと言い、その人脈を活かした交渉術と持ち前の実行力で多くの寺院を再興させたという。
・ 大山参りをする民衆のために、並木松を植えるなど多くの業績が伝わっている。

＜参詣者の道しるべ“並木松”＞

・ 大山観光道路を登っていくと、道の両脇に大きい松の木が立っている。
・ 昭和 40 年代、私が子どもの頃、バスや車でスキー場に向かうとき道の両脇にある並木松が雪の重みで車道に覆い被さっていたのがとても印象的であった。
・ この松を植えさせたのが「豪円僧正」である。

伝承者　足立修氏：

- ✓ 当時、人々の大山寺に対する信仰心は非常に熱かった。医学が発達していなかったので、村で急病人がでると夏冬、昼夜、風雨、吹雪などお構いなしに、村の代表が「大智明権現」の救いを求めて大山寺に上がってきた。
- ✓ そのため不慮の災難に遭うものが後を絶たなかった。
- ✓ 慶弔 7 年（1602 年）、参拝者の苦難を見かねた「豪円」は、当時山奉行に命じて、坊領、赤松、溝口の三道に道標として「大山参道並木の松」を植栽させたという。

・ 溝口道の松は、明治維新の際に民間に払い下げられてほとんどが伐採された。坊領道、赤松道の並木松は昭和 50 年頃まではかなりの松が残っており、坊領道で 17 本、赤松道で 48 本が大山町の保護文化財に指定された。

伝承者　遠藤勝壽氏：

- ✓ 昭和 62 年大山有料道路（現在の大山観光道路）が日本の道 100 千に選ばれた頃は、きれいな並木松が続いていた。
- ✓ 舗装などにより地盤が堅くなったこと、木々が生長して風通しが悪くなったこと、排気ガス、老化などの影響により次第に姿を消していったのではないかと語る。

- 昼夜を問わず大山に参った信仰心とそれに答えようとした豪円僧正の心が長い年月をかけて大きくなった並木松に垣間見ることができる。この松が大山に対する信仰心のシンボルとするならば、その数が年々少なくなっていくことに対する寂しさを感じる。
- 近年、森林管理署や環境省を中心として 2 代目の並木松を育てようとする試みが行われている。現在、高さ１ｍぐらいまで育っているが、この松が大きくなる頃にはどのような大山になっているだろうか。

＜養蚕の歴史と雪室＞

- 弓ヶ浜では昔から養蚕が盛んであり、たばこの生産が本格化するまでは桑の生産が主流であった。製糸工場などもあり、この地方の一大産業となっていた。
- この養蚕の技術をこの地方に伝えたのが「豪円僧正」だといわれている。

伝承者　足立修氏：

- ✓ 豪円僧正は、殖産のために但馬から蚕の種を取り寄せ寺領内に養蚕業を広めていった、そのうち江戸時代も末期になるとこの養蚕業が寺領外にでて広く藩領にも普及していった。特に弓浜地方では、今まで綿や綿花が一大産業であったが、桑がその 4～5 倍で取り引きされたため、農民たちは先を争って綿から桑へと作付けをかえていった。当時を知る浜の古老が「綿の木抜いて桑の木植えて、ワアチャ（お前たち）食う気か桑の気（食わぬ気）か」と呼んでいたという。
- ✓ 昭和の中頃まで「春大山」と言われた 5 月 24 日の春の大祭になると、「豪円山」山頂の豪円地蔵が真っ白になるほど真綿で巻かれてあった。この地方に養蚕業を広めた「豪円僧正」に対して、農家の人たちが感謝の気持ちと養蚕業のますますの発展を祈ってお参りしたものだと語る。

- 釈迦堂跡の直ぐしたに大きな雪室がある。冬に降った雪をこの雪室に詰めて覆いをかぶせて解けないようにする。標高が高く涼しい大山では夏を過ぎても氷が溶けない。

伝承者　遠藤勝壽氏：

- ✓ 昔この雪室で蚕の卵を冷やしていた。
- ✓ 蚕の卵は春になり、暖かくなると一斉にふ化してしまう。この雪室で蚕の卵を冷やしておき必要なときに雪室から出して育てる。桑の葉の成長に合わせて養蚕ができる。春に育てる蚕を「春蚕（はるこ）」、夏に育てる蚕を「夏蚕（なつこ）」秋に育てる蚕を「秋蚕（あきこ）」と言い年 3 回蚕を育てていたという。
- ✓ 伝承者の実家は、大山町妻木の農家であるが、昭和 20 年頃まで自宅で蚕を飼っていたという。自宅には部屋が４つあり、蚕を飼う時期になるとその内２つの部屋を使って養蚕をしていたという。

- 養蚕の歴史が豪円僧正から始まったと言うことは、余り知られていないが豪円僧正の大きな功績といえる、昭和の中頃まで 300 年以上にわたり伯耆地方の経済に影響を与えつつでたことになる。